

演じる人々

Louisa May Alcott & Anna Bronson Alcott Pratt の戯曲 *Comic Tragedies* における自由への渴望

山本 幹樹

1. はじめに

Louisa May Alcott の自伝的小説である *Little Women*(1868)には、姉妹たちの当時の遊びにまつわるエピソードが織り込まれている。Alcott の少女時代の遊びを元に描かれているが、四姉妹がとりわけ熱中したのが芝居であった。川西によれば、Alcott は実際に 1847 年前後 (Louisa 15 歳ごろ) 姉の Anna と共に戯曲を執筆し、姉妹たちと演じていたようである(43-44)。Alcott の死後、厳選された 6 編の戯曲が *Comic Tragedies* の表題で出版された(1893)。Alcott の人生にも作家活動にも戯曲は重要な位置を占めているが、これまで多くは議論をされてきていない。しかし、Alcott の執筆活動を通して作家自身や作品群をとらえるためには、戯曲を見過ごすことはできない。本発表では、*Comic Tragedies* を独立した作品として扱い、その中に共通する、キーワード「自由」を中心に論じていきたい。

2. *Comic Tragedies* の特徴について

戯曲は Shakespeare の影響を大きく受けている。擬古文体風で、主に王侯貴族の戦争や結婚について描かれている。6 編の表題はそれぞれ作中の人物を示しており、“Ion”を除けば全て女性が主人公である。その理由として、Louisa が女性の権利主義者であることを繰り返し標榜していたこと (*Hospital Sketches* 9)、平等主義者でもあったこと (*Encyclopedia* 58) が挙げられよう。

この戯曲の問題点は、つじつまが合わない不自然さがあること、“Ion”は未完に終わっていること、似たようなプロットで展開されていること等が挙げられる。また、結末を見ると、悲劇に終わるのは、“Norna”、“Bianca”の 2 作品であり、他の 4 作品は「ハッピーエンド」で締めくくられている。つまり、表題 *Comic Tragedies* との整合性の問題が生じる。

3. 渴望する人々

戯曲の中の人々はどのような状況にあるのだろうか。例えば、戯曲“Ion”では、トルコ人と戦うギリシャ国王である夫 Cleon の無事を祈る妻 Iantha のもとに、Cleon が戦争に敗れ、投獄され、有罪を宣告されたという知らせが届き(“Defeated, imprisoned, condemned,” 214)数日後には処刑されるという予告を受ける。その王を救うために、息子である Ion は敵国のトルコ王 Mohammed の元へ行き、自分の身柄と引き換えに父の開放を訴える。父 Cleon はこの時、完全に自由の利かない状況にある。

また、戯曲“Norna”の冒頭は Theresa という女性の独白から始まる。彼女は父の遺言によりそれまでに会ったことのなかった Rodolpho と結婚するが、後にその夫が嫉妬深く冷酷であるということが分かり、閉塞感に苛まれている。こうした精神的な抑圧が物語において描かれており、逆説的に言えば、人々は何かを渴望しているとも言える。このように、Alcott の戯曲では、人々にとって身体的な自由より、精神的な自由の方に価値が置かれる。その最も顕著な例が、戯曲“Bianca”に表れているだろう。主人公 Bianca は、Adelbert と恋愛関係にあるが、Huon に求愛されている。Huon は権力でもって Bianca に結婚を迫るが、彼女は強く拒否する。Bianca が去ったのち、彼は“Proud Bianca, now art thou in my power, and shalt ere long return the love of the once hated and despised Huon.”(266-7)と Bianca が自分の手中にあることを強調する。これは Huon が Bianca を従わせようという自分自身への決意でもあり、力があれば彼女を従わせることができるという盲信を示している。実際との乖離があり、それを力づくで埋めようとしているのである。更に彼は意のままにならない Bianca を高慢であると形容し、憎しみまで抱き、結果的に殺害してしまう。“Huon. Then die, and free me from the love and fear that hang like clouds above me [stabs her].” (274, underline added) 成就しない愛と、愛を乞うても繰り返し拒絶されてしまうという恐怖に Huon はさいなまれ続けており、そこから自由になることは、Bianca がこの世から去ることであると信じている。しかし、その後も決して自由を感じることはなく、魔女の呼び起こした霊に、リチャード三世さながら悩まされ、自身も倒れてしまう。そこには、まとわりつく霊に悩まされるだけでなく、己の犯した罪の意識も付きまとい続けたことだろう。6 編の悲劇的要素は、人々の死だけでなく、この精神的な苦悩から逃れられないところにあると言える。

4. 演じる人々、装う人々

作品中の人々はこのように自由を渴望しているが、自由を獲得するために、どういった行動をとるのか。特徴的なのは、時に変装し、また仮面を被り素性を秘匿することである。その人々が正体を明かすとき、立ち会

う人々は驚き歓喜するというドラマティックな展開となる。同時に、観客には誰が誰に成り代わるのかが明白なため、このドラマティック・アイロニーを楽しむことができるだろう。しかし、場面を変えて繰り返し行われるこのプロットは、単に演出上の役割があるだけではないと思われる。

1) 変装

その一つが変装である。変装の効果を最も表している例が“The Greek Slave”であろう。ギリシャ人の王女 Irene は結婚予定の相手 Constantine の元へ奴隷の Ione として入り込むことを決意する。“Yes, Constantine, as a nameless girl will Irene win thy heart; and when as a wife she stands beside thee, thou shalt love her for herself alone.” (153, underline added) 無名の一女性として愛を勝ち取り、その後正体を明かすことは、相手がある意味出し抜くことを目的としているようでもある。つまり、一女性による権力社会の転覆の試みとも読めるだろう。

Irene は奴隷 Ione の「仮面」を被ることで、王子に近付くことができ、また城の内外に行き来することができるといったある種の自由を獲得する。彼女は時に強い意志を示し、Constantine が従う意図を見せる場面も見られる。“Thou [Irene] hast led me to my duty; I will obey thee.” (185) このように、主従関係の逆転さえ生じる。

Irene は徐々に Constantine の信頼を勝ち取っていくが、ここで発揮されるのは、そもそも Irene 自身に本来備わる能力であり、変装したから得られたものではない。つまり、素性を秘匿することによってかえって浮き彫りになるのは、彼女自身の本質であるということが言えよう。変装の効果は、実はそこにあると言えるのではないだろうか。

2) 匿名という信頼性

素性を秘匿するもう一の方法として、自身の名前を秘匿する点がある。例えば、敵国王 Mohammed には娘 Zuleika がいるが、捕らわれた Ion を秘密裏に救おうと、彼の元へ赴く。突然現れた彼女を幻影か、霊かと問う Ion に、Zuleika は次のように答えまる。“I am no vision, but a mortal maiden, come to bring thee consolation.” (236) 彼女は自分が一女性であると名乗り、国籍、身分などを秘匿している。結果的に名前を秘匿することで信頼を得、相手から本心を引き出すことも可能となる。つまりここには、アイデンティティの問題が潜んでいると考えられる。言い換えれば、何をもって自らのアイデンティティとするのか。そこには既定のアイデンティティ（ここでは名前、それが意味する属性等）から自由になることへの渴望も見られるであろう。このように既定のアイデンティティが自らの意思とは異なる力を持ち影響してしまうこと、逆に、他者を装うこと、あるいは何ものにも属さないような匿名性について、作品中にはそれらの持つ力や意義についての探求があるようでもある。

5. 魔女、ジプシー、牧師の存在

この戯曲の特徴としても一つ挙げられるのは、魔女やジプシーの女性や牧師が登場する点である。彼らは主人公に対して協力的であり、好意的に描かれている。また“Captive of Castile”において、牧師 Hernand は Zara がムーア人の父の娘ではなく、母とイングランド人との間の娘であるという事実を暴露し、Zara の父王に対する反抗に背中を押す役割を果たす。このように、戯曲に登場する聖職者は神の使いとして人々を導く、と言うよりは、主人公を比較的鼻息して力を貸し、彼らの希望に寄り添って後押しするという役割を担っている。纏めると、魔女、ジプシー、牧師は、自然に近いところで生活し、神秘的でもあり、一面において自由に生きている。彼らは他の人々よりも多くを知り、真実を伝えるという点で共通している。つまりこれらの人々は「知」を得るものが自由性を持つ、その象徴と言えるだろう。

6. 結末について

戯曲“Norma”や“Bianca”では殺害を行った男性が霊に苦しめられて終わるのに対し、他の作品は希望を抱えて終わる。しかし、単純なハッピーエンドとは言えない。例えば、戯曲“The Unloved Wife”はそもそも、結婚後の夫婦生活が綴られており、おとぎ話のように「結婚して幸せに暮らしました」と言うのとは異なる。つまり、結末は「幸せに暮らしました」とクローズされておらず、開かれていると言えよう。このようにはるか遠くの目的地を想い旅を進めていくのが人生であるという人生観が伺えるが、そこにも、ある種の憧憬や渴望が込められているだろう。

参考文献

Alcott, Louisa May. *Alternative Alcott*. Ed. Elaine Showalter. New Jersey: Rutgers UP, 1988.

---, Anna Bronson Alcott Pratt. *Comic Tragedies*. Boston: Roberts Brothers, 1893.

Alcott, Louisa May. “Hospital Sketches.” Alcott, *Alternative* 1-73.

Eiselein, Gregory and Anne K. Phillips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Connecticut: Greenwood P, 2001.

川西弘子. 「ルイザ・メイ・オルコットと演劇 (1) 1869-1888」. 日本大学芸術学部紀要 46 (2007): 41-49.